

私を裁く方は主です。ですから、主が来られるまでは、何事についても先走って裁いてはいけません。主は、闇に隠れた事を明るみに出し、人の心の謀をも明らかにされます。その時には、神からそれぞれ誉れを受けるでしょう。（Iコリント4：4b～5）

Iコリント4章は、使徒の使命について書いている。使徒とは「遣わされた者」という意味で、初代教会においては、主イエスの12人の愛弟子に付けられた称号であった。パウロは自分を「使徒」と名乗っている。伝道者は皆、神から遣わされた使徒であるが、パウロは12使徒と同等であるという意味において、自分は使徒であると主張している。4章は、その使徒の使命と使徒の教会との関りについて書いているが、記述から、パウロはコリント教会の信徒たちから、手厳しい批判を受けていたことが分かる。今日、伝道者としてのパウロについて、全ての人々が敬意をもって学ぼうとし、批判などは皆無と断言していいだろう。ところが、肉を持って生きていたパウロに批判を浴びせ、目の前で展開している彼の真実を受け止めなかった人々がいたということである。主イエスは、律法学者たちは昔の預言者に敬意を払うが、目の前で神の真実を表す主イエスを殺そうとしていると見抜いておられる（マタイ福音書23章）。遠いところは見えるが、近い今が見えないことはどこにでも見られる人間の視野の狭小性である。パウロ批判は四つ、考えられる。①パウロは主イエスに直接教えを受けた愛弟子ではない。初代教会において、愛弟子は尊敬を集め、他の伝道者たちとは違い、高く評されていた。②パウロは愛弟子でないばかりか、クリスチャンを迫害していた人である。回心したとは言え、彼のクリスチャン迫害は評価を下げた。③パウロのコリント伝道は、十字架の愚かさに徹し、弱さを通して低みに立っての伝道で、そのことが、知識があり裕福な人たちから軽蔑された。コリント教会でのパウロ批判は、このことが最も大きかったのではないか。④パウロは伝道している最前線の教会からは、自由な言葉を確保するために謝儀を受け取らなかった。このことは謝儀を受け取る値打ちのない、二流、三流の伝道者と見なされた。（9章に詳しく論じている。）

これらの批判を受ける中、パウロは、使徒はキリストに仕える者、神の秘義の管理者であると述べている。キリストに仕えることは基本である。そして、神の秘義（福音）の管理者に求められることは「忠実」であることである。忠実（ピステイス）で、信頼を意味している。信頼は周りの事情に左右されるところでは生まれにくい。だから、人から裁かれ、法廷で裁かれようと、何ら意に介さない。自分で自分を裁くこともしない。やましいことは全くないが、それで「義」とされている訳ではない。他者批判、自己批判を一切無視すると言うのではなく、もっと決定的なことがパウロを支配していると言う。「私を裁く方は主です。」裁く方は神のみである。更に、神の裁きは終末時に下される。「主が来られるまでは、何事についても先走って裁いてはいけません。主は、闇に隠れた事を明るみに出し、人の心の謀をも明らかにされます。その時には、神からそれぞれ誉れを受けるでしょう。」人間の浅はかな知恵で、裁いてはならない。キリストが再臨する時には、闇に隠れた事も、心の中の謀も皆、明らかにされる。その終末時の裁きが確かな裁きであり、そこで、忠実に生きた使徒は誉れを受ける。パウロは、コリント教会のある信徒たちの批判に対し、あなたがたの裁きに心を動かされることはないと言い、終末時の裁きに全てを委ねていると、使徒としての忠実な信仰を披瀝している。